

景観フォーラム

巻頭言

日本の政治環境が右傾化して来たと言われて久しいが、今回の“共謀罪”という法律が通過されたことで、日本の社会は右傾化というより、政治家の意向でどうにでもなる完全に右翼路線に突入してしまったことになる。ナチスが右翼路線に舵を切ってヒトラー独裁に走った時間はなんとたったの2年であった。

戦後70年、民主主義という安全弁を執って政治を運営してきた日本ではあったが、もはや、嘗てのドイツヒトラー政権と同等な状況にいつ何時なってもおかしくはない政治情勢になっていると言っても過言ではないだろう。日本景観フォーラムは政治を論議する団体ではないが、民主主義を前提に成り立っている団体であるが故に、民主主義を全面否定する政治情勢にははっきりノンと表明する次第である。ドイツがワイマール憲法という当時としては名だたる民主主義憲法を持っていながらにして、ヒトラーに独裁政権を許したのはその当時のドイツ国民の責任であった。従って、私たちも未来に禍根を残さない決意を持って、民主主義を破壊する勢力に対しては、はっきりノンを表明しなければならない。

“景観から考えるまちづくり”とは、独裁者が勝手に創るまちづくりではなく、住民一人ひとりが自由に喜怒哀楽を交わしながら豊かさを平等に分ち合えることを前提にしたまちづくりのことである。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム2017年度（平成29年度）年間スケジュール>

* 2017年度とは2017年4月1日⇒2018年3月31日のことです。

2017年

4月25日（火）第1回理事会・総会 於JICA研究所

5月27日（水）**景観まちあるき**：浅草界隈（台東区）担当：齊藤

7月10日（水）**景観研究会***：今回は研究会の具体的内容の検討会 於JICA研究所

8月 夏休み（景観研究自由参加）or 一泊二日で遠方の町並み見学会など？

9月15日（金）**景観研究会** 19:00~21:00 「近郊のまちづくりの現状①」於市ヶ谷JICA603号室

10月13日（金）**景観研究会** 19:00~21:00 「近郊のまちづくりの現状①」於市ヶ谷JICA603号室

10月25日（水）第2回理事会 於JICA研究所

11月25日（土）**景観まちあるき**：11月25日（土）場所は9月10日の研究会にて決定します。

12月14日（木）忘年会 会場は検討中

2018年

1月26日（金）**景観研究会**：「四谷のまちづくり」 於市ヶ谷JICA研究所

2月23日（金）**景観研究会**：「住宅地沿線のまちづくり」 於市ヶ谷JICA研究所

3月25日（土）**景観まちあるき**：場所は研究会の話し合いで決定

* **景観研究会**：このたび景観セミナーを景観研究会と名称を改め、広く一般に参加者を募ることより、会員の皆様の景観研究を主体にした10人程度の研究会にしようかと考えました。外部からの参加者も自由に参加は出来ますが、講演形式よりも講師を囲み自由に議論できる形態にしたいと思います。

景観ハンドブック：会報52号（2017年4月号）のブックレビューに『美しい日本の町並み』をご紹介します。文庫本で大変よくできておりますので、是非とも購入して景観まちあるきのハンドブックとしてください。

フィンランド共和国の景観紹介（その4）

NPO法人日本景観フォーラム 理事

フィンランド健康福祉センター・FWBCフィンランドOy 東京事務所代表 石見茂夫

5. フィンランドの景観に調和した施設紹介（ランドスケープ-1）

前回までにコンサートホール、教会やケア施設、病院を紹介しましたが、今回は北欧デザインに基づいたフィンランドのランドスケープ関連施設をご案内します。

A. ハウキラデン展望台（給水塔兼展望レストラン） エスポー市

ヘルシンキ市の西側に隣接したエスポー市はヘルシンキ都市圏最大の都市として発展し約27万人弱の人口は首都ヘルシンキに次いでフィンランド第2位を占めています。世界的な大企業である、通信IT系企業のノキア社やエレベーターのコネ社が本社を置いています。

ハウキラデン展望台は給水塔の建設に伴いその上部を利用して設置され、レストランと共に一般に開放されています。



建築デザインはエルコ・バイリックネン、構造設計はリマリ・ハイパネンにより1968年に完成しました。給水塔は100トンの容量で地上からの高さは46m、海拔76mです。給水タンクの上部は展望台の他にパノラマレストランとして利用されています。高層建築物が少ない当地では遠方からも眺められるランドマークとして市民に親しまれています。



B. 市民公園 エスポー市

ヘルシンキの衛星都市として発展してきたエスポー市には数多くの都市公園が作られています。

森と湖の国と言われているフィンランドの都市として近隣にある多くの湖や平地の森と一体となった公園が整備されています。

冬季は日照時間が短く公園の利用者は少なくなりますが、日が長い夏季は一気に利用者が増え活気が戻って来ます。



4月下旬からは花壇やプランターに多くの花々が咲き誇り緑の芝生と相まって美しい景観を作り出しています。多くの公園には石や金属の他木製のオブジェやモニュメントが設置されています。

ベンチやゴミかごなどのストリートファニチャーもデザインの国フィンランドらしい機能とデザインが公園に融合しています。



C. スキージャンプ台 ラハティ市

ヘルシンキ市の北100 Kmにあるラハティ市には世界的に有名なスキージャンプ台があり、ノルディックスキークの国際大会やワールドカップのジャンプ競技が数多く行われています。

市のランドマークとなるスキージャンプ台はサルパウセルカの名前でラハティ・スポーツセンターの一角に有り、付近にはクロスカントリースキー・コースもありこちらもジャンプ台と合わせ世界選手権大会に使われています。敷地内にはサッカースタジアムがありFCラハティ、アイスホッケー場はラハティ・ペリカンズの本拠地となっています。

ランドスケープ景観を重視したスキージャンプ台は、写真の左からラージヒル(K点116m)、ノーマルヒル(K点90m)、ミディアムヒル(K点65m)で構成されていて、ラージヒルのタワーは展望台になっていて大会や練習で使われていない時は一般に開放されラハティの街を一望できます。

日本でも知られているスキージャンプ選手のヤンネ・アホネン、トニ・ニエミネン、ユリア・キュッカネンの出身地でもあります。

今年(2017年)は7回目のノルディック世界選手権大会が開催されました。女子ノーマルヒルでは優勝は逃しましたが、伊藤有希選手(2位)、高梨沙羅選手(3位)、混合団体では3位入賞を果たしたのは最近の記憶に残されました。



D. 中心市街地の遊歩道 オウル市

オウル市はヘルシンキの北約600 Kmにある人口約14万人で国内第6位の中部最大の都市で周辺の都市圏を含む人口は23万人です。ボスニア湾に面した港湾都市で古くから金属・化学工業が発展しているが、近年ではノキアを主としたIT系の世界最先端産業が進出しています。また北約160 Kmにはサンタクロースで有名なロバニエミがあります。

市内には高層建築物が少なく整然とした中心部には多くの遊歩道が整備されています。ヘルシンキに比べ冬季には暗い時間が長くなり街路や広場を照らす照明塔が設置され歩行者への対策が取られています。

もちろん電柱等は無くケーブルは地下に埋設されていて街並みが更に美しく見えます。広場には石材やプロンズでできたモニュメントやオブジェが設置されています。歩車道分離はもちろんですが、自転車の専用道の整備も進んでいます。それらのペーブメントは石材を多く用い舗装パターンのデザインを変えて判りやすくなっています。



神の国、山陰 美保関のまちを訪れて

NPO法人日本景観フォーラム
安川 久美子

6月も終わろうとする曇りの日今日、魂がなにやら騒がしくなってきた。以前、松江市に住む友人に連れていってもらった場所に無性に行きたくなくなったのだ。思い立ったら即行動開始、一仕事終え、やまなみ街道（尾道松江自動車道）を抜けた後、左手側に「宍道湖」、次は右手側に「中海」、そして「境水道」を眺めながら、「美保湾」へ。贅沢な道を走ること3時間、いよいよ目的地の「美保関のまち」とともにある「えびす様の総本宮美保神社」へとたどり着いた。夕方5時前だった。



「良かった～まだ神様に会える時間！」 足早やに、美保湾に面した神社の鳥居をくぐり抜け、参道を進む。見事なまでに大きく立派なしめ縄の門を見上げた瞬間、緊張とともに厳かな気持ちへと切り替わった。私は、この瞬間が好きだ。階段を上り、しめ縄の下を潜ると、「美保造」または「大社造」とよばれる特殊な造りの社殿が現れる。大変立派で歴史を感じる神社だ。733年編纂の『出雲国風土記』と927年成立の『延喜式』に社名が記されているだけでなく、古墳時代からこの地で色々な祭祀が行われていたとは大変なロマンを感じる。



参拝を終え、もと歩いた参道を歩く。
神社の鳥居の向こうは、海！
鳥居のすぐ向こうにゆっくりと船が動いている。
鳥居はまるで映画のスクリーンのように見える。
私は、以前観たこの景色が忘れられないで、
今日、再びここに来たのだ。

鳥居を出ると、すぐ横に、もう一つの忘れられない素敵な景観をもつ場所がある。海の青石を敷き詰めた「青石畳み通り」、その名の通り、雨で湿ると、青色に輝いて見えるという。今日が雨ならもっとしっとりとして綺麗なことだろう。この道は、美保神社から仏谷寺へと続く参拝道。江戸時代は、北前船の風待ち港の街として栄え、廻船問屋が連なっていたそう。すっかり静かで寂しささえ感じる今は、往時の面影ゆかしく不思議な郷愁に包まれる。

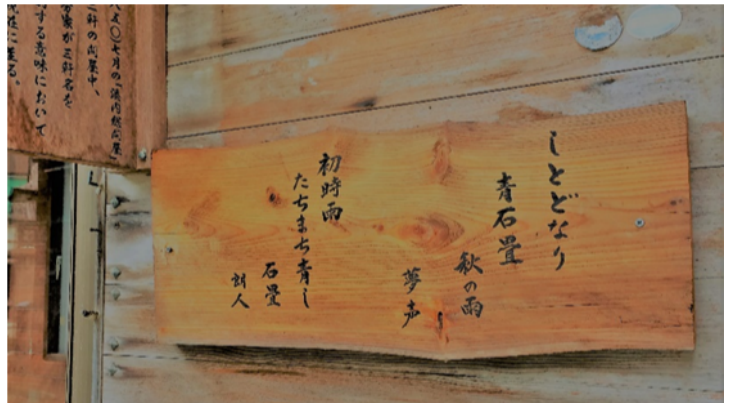




30分余り過ぎただろうか、夕刻を知らせる合図のような音楽がどこからともなく流れると、ひとときノスタルジックな宿に灯りが灯った。

「あの宿の名は何ていうのだろうか？ この街で今、唯一近代的なものは私の手のスマホonly・・・（検索）・・・『美保館・本館』、明治38年に着工、当時の灯りや黒電話もそのまま・・・美味しい料理、大山を眺めるオーシャンビュー」 徳川夢声、湯川秀樹、島崎藤村、高浜虚子・・・多くの文人がこの宿の一室で筆を走らせたそうだ。インスピレーションが湧く、否、ここ神の地では、降りてくるといほうが正しいのかも知れない。「美保関」ここを訪れた文人墨客たちは、この場所に佇み、どんな思いを馳せたのだろうか。

昨今、どの観光地においても、たくさんの人で溢れ、近代的な新しい建物やお馴染みのチェーン店の看板が目にとまる。しかし、今日ここで平日の夕方とは言え、小1時間で、すれ違った観光客は3~4組。そして、古い建物がそのままに、ネオンやチェーン店の看板などない。美保関町で、コンビニはここからずいぶん離れた場所にたった1件だけ。都会の喧騒や、時間や効率に追われる現代の生活は無縁に感じられる。そんなことは、全て忘れて心身を癒せる貴重な場所なのだ。



ふと気が付くと、海のカモメと山に棲む鳥たちの声が聴こえてくる。海と山の鳥たちの素敵なアンサンブル。真夏を待つ美保湾の潮風はとても甘い香り。ころまでトロンとしてくる。山の方向に空を仰ぐと美保神社を包む山の木々が深く高きに渡りに太く隆々としていること。木々の樹齢の長さは如何ほどであろうかと思ったとき、再び敬虔な気持ちになる。

さあ今日はもう帰らなきゃ。今にも、先ほどの宿で一泊したいと想いは募るばかり。でも今日は、半日の休暇、この地で元気が蘇ったところで、またもや長距離ドライブで帰路へと向かう。夜の高速道路を余韻に浸りながら走る。まさに五感で景観を感じて、癒されて、元気を取り戻す。こんなにも人が人であることに還れる場所が、日本の中にまだまだたくさんあるに違いない。

< L F J ブックレビュー53 >

『世界の路地裏100』及川さえ子編集 2005年刊 発行所 ピエ・ブックス
 『新世界の路地裏』及川さえ子編集 2008年刊 発行所 ピエ・ブックス

世界の路地裏と称するこれらの写真集は主にヨーロッパを中心に対象にしており、またヨーロッパの影響を受けた国々の裏路地を垣間見たものである。尚、韓国、メキシコを除いてアジア・中東・アフリカと南北アメリカ諸国はほぼ省かれている。

先ず、『世界の路地裏100』ではスペインのアルテア、コルドバ、ミハス、ロンダ、カサレス、セビーリア、フリヒリアナ、バルセロナという具合でバルセロナ除いて殆どニュースにも出てこない街々である。であるからこそ、その路地裏の街並みは何とも言えぬ味わいがあり、写真だけを観ていてもじっとそこにいたくなる錯覚をもたらしてくれる。バルセロナと言えばかの有名なサグラダ・ファミリア（聖家族教会）を造った（まだ完成はしていないが）ガウディ、世界を常に驚かしていた奇態の画家ダリ、鮮やかな色彩の魔術師ミロそして少年時代からそこで生きたピカソという世界的に有名な芸術家たちを育んだカタルーニャ文化の街である。次にフランスはリヨン、パリのモンマルトル、ニース。そして、ロドス島を筆頭にエーゲ文明の発祥地の島々の街の裏路地を見せてくれる。イタリアのシエナ、ヴェネツィア。そして、チェコのプラハ。ロンドンの路地裏にあるパブ。ふらふらと黒ビールを注文しに酒場へと向かう人々。韓国はソウル近郊のイムンドンというあまり美しくないが活気ある路地裏。そこここに歴史からはみ出した人知れぬ人情が溢れている。

『新世界の路地裏』ではその名も花を意味するフィレンツェの美しい路地裏。スペインのグラナダの白亜の家並みに赤いバラ。イギリスでは現代社会から想像もできない静謐な街並みを持つコッツウォルズ。中生世界をそのまま味わえるチェコとクロアチアの町並みと猫。エキゾチックな港町カサブランカ。重厚な豊かさを讃えるボルドーとマルセイユの街並み。ブルガリアの可愛らしい窓の街並み。そして、都市の美を誇るブタペスト。これらは、皆そこに生きる人の息遣いが感じられる路地の景観であり、日常である。

ヨーロッパを中心とした街並みと路地裏が素晴らしいのは、そこに生きる人々が過去という痕跡を大事にしてきた時間というものを感じさせる何かがある。ドイツのドレスデンは第二次世界大戦の大空襲で都市に壊滅的被害を被ったが、住民の一人ひとりの努力によって歴史的街並みを完全に復興させた。それは、その街並みに寄せる市民の並々な愛情がそうさせたのであり、煉瓦の一つ一つが彼らの歴史の一齣一齣であることを証明している。

景観から考えるまちづくりを提唱する際、最も大事なことは何であろうか。その場に生きる住民一人ひとりが考えなくてはならないことではあるが、恐らく、そこに生きる老若男女が最もよく集まる場所で且最もゆったりできる場所を共有することではないだろうか。それは市場であったり、路地裏であったり、待ち合わせの場所であったり、人々が生き生きとしているところである。そこには、人間ばかりでなく、猫や犬たちもたくさん集まってくるのではないか。（斉藤全彦）



天地玄黄 ⑭「福祉や食と同じくらい、景観は地域の力になる」

今回は平成29年1月23日（月）福井新聞に掲載されました、
景観アドバイザー、京都市立芸大教授 藤本英子さん
の記事をご紹介します。

景観デザインという言葉は、今でこそ一般的かもしれませんが、かつてはあまり認知されていませんでした。景観デザインは土木、都市計画、デザインとさまざまな専門分野にまたがりますが、それらの分野をつなぐ専門家が景観アドバイザー。行政と事業者と市民をつなぐ役割も担う存在です。

よりよい景観づくりをするには、屋外広告物について考えることがとても大切なことです。既存の町並みと新しいオフィスなどが一体になるには、目立つことだけを考えた規格外の看板を設置してはいけません。地域のことを考えない事業者は、過激な色の看板などで景観を壊します。

現在、関西の自治体を中心に、建物や広告物の色や形についてアドバイスしています。京都市は厳しい条例を敷いて、行政として景観を守ろうとしています。一方で、他の自治体では、景観法の観点から違法と思われる広告物が目に付きます。

違法広告物は、人に心理的な圧迫を与えることだけでなく、危害を加えることもあります。2015年、札幌市で飲食店の老朽化した看板が落ちて通行人が負傷した事故がありました。メンテナンスをしないで放置すると大きな事故につながりかねない。違法な屋外広告物の一例です。看板設置を請け負う事業者、管理を担う当事者、許認可にかかわる行政は、景観配慮と同時に安全意識も高めるべきです。

景観づくりは地域の力につながります。昨年末の「ふるさと福井 景観広告賞」の優良デザイン部門の一つに、福井市浜町の料亭が選ばれました。シンプルながら品の良さを感じさせるのレンガがある店構えが評価されました。軒下にあんどんが置かれ、店の気遣いにもにじみ出ている。町並みにもマッチしている。景観ってすてき、と思うんです。

「うちだけ良ければいい」という考えではダメで、地域が持っているイメージに合わせる事が重要です。そうすれば地域力が高まっていく。福祉や食と同じくらい、景観は地域の力を後押しします。

景観デザインの最終目的は地域に住む人が快くいきること。そのためにはシビック・プライド、住民が自信を持つことが大切。歴史や建築物など自慢できる要素や個性があるとなおよいと思います。

(聞き手・岩崎由莉)

景観アドバイザー、京都市立芸大教授 藤本英子

1958年、大阪府生まれ。東芝の商品デザインに携わり、89年に公共空間デザイナーとして独立。景観アドバイザーとして活躍する傍ら、京都市立芸術大教授も務める。著書に「市民のための景観まちづくりガイド」（学芸出版社）などがある。

〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL：03(3780)3814

FAX：03(6379)6681

E-mail：info@keikan-forum.com

URL：http://www.keikan-forum.org



Landscape Forum of Japan